

明珠

龍泉院
参禅会会報

〈犢・太雄一泊参禅〉

従容録に学ぶ (七)

第八五則 国師塔様

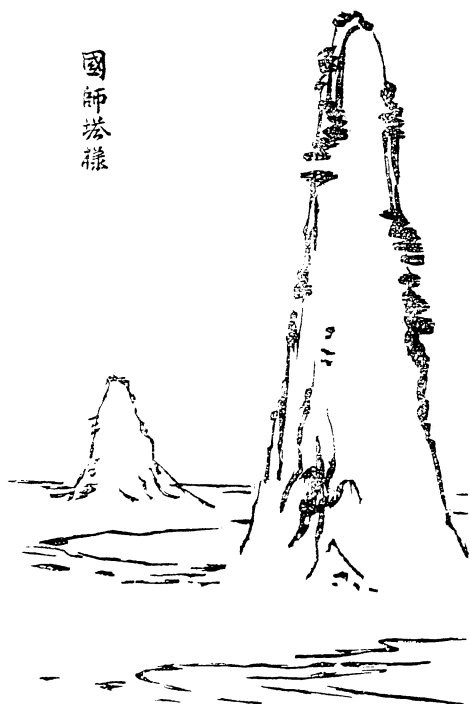
〔示衆〕

衆に示して云く、虚空を打破する底の鈞錘、華嶽を壁開する底の手段あって、始めて元と縫罅なき処、瑕痕を見ざる処に到る。且く、誰かこれ恁麼の人ぞ。

〔本則〕

挙す、肅宗帝、忠国師に問う、百年の後、須むる所は何物ぞ。(即今また少なからず。) 国師云く、老僧がために箇の無縫塔を作らんことを。(いずこに向って手を下さん。) 帝曰く、師に塔様を請う。(描けど成らず、書けども就らず。) 国

師、良久して云く、会すや。(這裏に会すを得ず。会せざれども別に求むることなかれ。) 帝曰く、会せず。(却って些子に較べり。) 師云く、吾に付法の弟子耽源あり、却って此の事を諳ず。(祖の禰了ざれば殃は児孫に及ぶ。) 後に帝、耽源に詔して此の意いかんと問う。(作家の君主、遺囑を忘れず。) 源云、相の南、譚の北。(天は高く地は厚く、日は左、月は右。) 中に黄金ありて一国に充つ。(虚空に晶塞す。) 無影樹下の合同缸。(密々として金刀、剪れども開かず。) 瑠璃殿上に知識なし。(寂々として簾垂れて顔を露さず。)



国師塔様

この則は、南陽の慧忠国師（*七七五）と皇帝との機縁がテーマです。国師は六祖慧能の法嗣で、南陽（河南省南陽市）の郊外にある白崖山の香嚴寺に住し、四〇年間山を下らずにすぐれた禅風を掲げたので、代宗は長安の都に招いて師の礼をとったといわれる名僧です。この則で肅宗とあるのは誤りで、実は代宗との問答です。

本年九月三日、わたくしはこの白崖山香嚴寺（今は香岩寺）を訪れました。南陽市から往復何百キロもの悪路をバスとジープにゆられ、琵琶湖の何倍もある中国最大のダム、丹江湖を渡り、艱難辛苦して山中の伽藍を礼した感慨は一人でした。特に、右手の幽邃な竹林中に佇む、崩れた土屏に囲まれた慧忠国師の塔院を拝した感激は、何とも生涯忘れえぬ思いでした。ここは、禅門で名高い香嚴拏竹の舞台でもあったからです。香嚴智閑は、この寂莫たる塔院を清掃する一日、竹をうつ石の音で悟りを開いたのです。

さて、万松の「示衆」は、要するに、空相に陥ち入ったり、その反対に対象物にのみ心うばわれるという両極端な病いを除いてこそ、はじめて清浄な心の世界に到るのだ、と国師の「本則」の眼目を教

えています。

次に「本則」です。帝「あなたは死後、何をお望みか。一国師「無縫塔を立てて下され。」「大さきや高さは？」国師はしばらく黙ってから「おわかりかな。」「判らぬ。」「弟子の耽源からお聞きめされよ。」「そこで帝が耽源を召して聞くと、耽源「東西南北いずこにも、くまなく黄金充つれども、実体のなき乗合船、親しき御殿に知識なし。」「

ここでのテーマは無縫塔の造立です。無縫塔とは、もともと一魂りの石塔という意味で、僧の墓塔です。この問答は、もう国師が晩年のことだったのでしょう。国師



慧忠国師塔院の門

がこれを立てて下さいというのは、帝に真実の仏法を行い、天下にそれを広めて下さいという意味でした。あえて無縫塔といったのは、死後百年にかけて意味深玄なテーマを呈し、自ら体得させようとした老婆親切でした。帝はそれを常識的な石塔だと思い、形状などを聞いたので、国師はしばらく黙った。ここが大切です。

沈黙は活力の源泉であり、いのちの母です。その顕在的ですがたが坐禅です。私たちにあっては、現に兀々と坐ることが無縫塔を立てることになる。坐禅という大沈黙の行が、真実の生命活動となるからです。こうした真実の仏法の世界は、仲々言葉では説明できない。そこで国師は沈黙したが、帝にはわからないので、後で弟子に聞いてくれと言った。こうした時間には尊いのです。真実を会得するには時節因縁が熟さなければならぬからです。万松の「映は児孫に及ぶ」とは、決して悪い意味ではありません。

さて、耽源も並の弟子ではありません。耽源山の応真さんで、禅門でさかんに用いる円相は、この人が元祖なのです。で、国師から無縫塔の真義を教えられていたので、帝に詩の形式で答えました。

どこにでも黄金が充ちているとは、無縫塔という法身の普遍性をいうのです。法身については、すでに五二則「曹山法身」で学んだように、宇宙世界に充ちている仏のいのちですね。ただ国師は、法身といっても樹の影のように実体はなく、悟りは分別知識をこえている道理を教えています。

恐るべし、峰の色も谿の響きも、常に移ろい変わっているのです。法身を見るからこそ、そこに仏の姿を見、法の声を聞くのですが、それにとらわれてはならない。只管打坐といっても、そんな意識のかけらほどもなく、無心に淡々と坐るのがホンモノです。

この辺を道元禅師は、「もし法身にさえられぬるには、いさか身を転ぜんとするにもかなはず、出身の道あるべし」と、法身のとりこにならず、常に自由な心で精進すべき出身の一路を強調されています。慧忠国師には、別に無生物に法身を見る「無情說法」の教えがある一方、ここではそれに陥ち入るまじき道理を説かれるのはありがたいことです。

私たちは、真理に酔いしれていてはダメなのです。塔院にひびく撃竹の声を、不断の努力精進のうちにわが心に聞きたいものです。



大雄山一泊参禅参加者一同（S63, 6, 5）

大雄山での一泊参禅

六月四日、午前九時三〇分、龍泉院を出発したバスは、椎名老師ほか二十八名の参禅会員を乗せて、神奈川県、南足柄市大雄町にある、大雄山最乗寺に向いました。

第三回目の一泊参禅の旅です。

心配された昨夜来の雨もすっかり上り、参加者一同、どの顔も明るく、生活の雑事も忘れ、深山での一泊参禅への喜びが溢れていました。車中廻されたマイクの前でそれぞれが、その思いを語りあい、一路老杉のそそり立つお山へと、心はずませました。

最乗寺では、次の差定により、参禅の日課がはじまりました。

第一日 六月四日（土）

法 話 午後二時三〇分
坐 禅 午後三時三〇分
入 浴 午後四時三〇分
薬 石 午後五時三〇分
夜 坐 午後七時
御供式 午後八時三〇分
開 枕 午後九時三〇分
第二日 六月五日（日）
起床洗面 午前五時三〇分
小 食 午前七時
作 務 午前八時

坐 禅 午前九時
禅 講 午前一〇時
下 山 午前十一時三〇分
こうして、一泊参禅の団参は、無事終了しましたが、心に残りましたのは、

山主様の「一現成公案」の法話でした。すべて、計いの中で生きていく私共の心に、一石を投ぜられた思いが残りしました。また、その夜 闇の中に、松明のあかりで、おごそかに行なわれた御供式にご縁をいただき、今でも、このお山をお守りされている、妙覚道了大薩捶に対する思慕と感謝をこめたこの御式は、霊山をゆるがす思いがこめられ、息をのむ思いで参拝させていただきました。

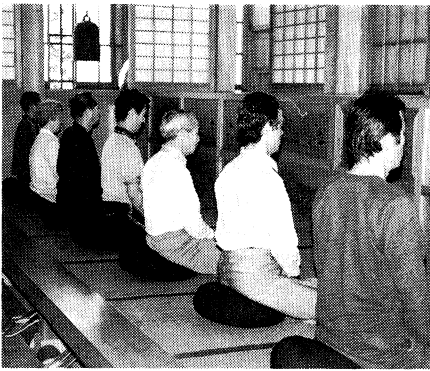
そして、翌日、椎名老師からいただきました「良寛詩抄」の禅講でした。融通無碍の世界に生きる良寛禅師の本来の面目が、躍如として輝き、聞く方々はしばし魅了されたひと時でした。

ここに、参加者の方々から寄せられました参禅記を順に綴らせていただきます。なお一泊参禅の企画に際し、山主様、はじめお寺の

皆様の温いお心くばりに感謝いたしますと共に、御多忙中の椎名老師はじめ、高間先達、小畑・加藤両幹事、ならびに写真を毎回担当していただいております徳山様に、参加者一同、心より感謝申し上げます。

(参加者)

五十嵐嗣郎、石井勇、小畑節朗、加藤健之、佐藤勝男、佐藤初恵、沢村国勝、四宮清二、清水秀男、下村忠男、添田昌弘、染谷はる、高野千代子、武田博志、武山喜代子、寺田哲朗、徳山浩、富田文中川俊二、中嶋南洲男、原力三郎平沢満代、三町勲、宮田哲男、森岡俊雄、安本小太郎、井之輪進、清水利一、(敬称略)



大雄山の正式な坐禅堂で

厳かな御供式

柏市 染谷 はる

一泊参禅の節は、大変お世話さ
まになりました。前日の雨も上がっ
て、晴天に恵まれましたことは、
より楽しい参禅となりました。大
雄山最乗寺の山門をくぐってから
の杉の大木は、目を見はるばかり
でした。到着してすぐ山主様のご
法話をいただき、その一言、一言
は身にしみいるお話でした。その
夜、お灯明だけが風に揺れる闇の
中でおごそかに行なわれた御供式
には、私共が夕食で頂いたご馳走
と同じお膳の品をお供えになると
のこと、お膳を頭に頂いて、早足
でささげるお姿に、私はただ、合
掌いたしました。

翌日、朝食後の作務は、私の体
の中まで、お掃除が出来たように、
清しい気分になりました。椎名
老師様からの、「良寛詩抄」の禅
講も、良寛様の、とらわれない自
由な詩についてユーモアを交えな
がら話され、大変感動をいただき、
文章など書いたことのない私も、
勇気を出して参禅記をまとめさせ
ていただきました。

有難うございました。

一泊参禅偶感

船橋市 森岡 俊雄

六月四日、神奈川県南足柄市に
ある、大雄山最乗寺に一泊参禅い
たしました。椎名老師、小畑、加
藤両幹事のお世話で、参禅会一行
は、午前九時三〇分龍泉院を出発
し、途中食事をとり、最乗寺につ
いたのは、午後二時頃でした。山
主様の法話、坐禅、と続きました。
夜になって行なわれた御供式は大
変深く心に残りました。

愚工は、鍛冶屋以外は、何も出
来ない人間ですが、何か会のため
に出来ることはないかと思い、小
畑先輩のご助言をえて、達磨大師
の偈を刻んだ文鎮を二本作りまし
た。

吾本来兹土、伝法救迷情

一華開五葉、結果自然成

推選でお二人の方にお贈りするこ
とが出来ました。

「偈」の意味について、御老師よ
り説明をいただき、華をそえてい
ただけまして、有難く思います。

今回の参禅会で、中川先生(医
師)と坐禅について、意見が一致
したことは、小生にとって良い思
い出となりました。

つねに思うのですが、稽古事の

段界は、守、破、離、と申します。
何事によらず、離、となったなら
ば、坐禅を習うのが一番よいと考
えます。

天狗様のお寺に詣って

船橋市 井之輪 進

六月五日(六日)の一泊参禅会は、
大雄山最乗寺に於て、一泊の参禅
が行なわれた。

最乗寺は、東名高速道の大井松
田インターを下りて、大雄山駅前
を通過してインターから三〇分程
で到着した。昨夜迄の低気圧接近
による台風並みの暴風雨もすつか
りおさまり、今日は晴天で、龍泉
院を出発してからのバスのドライ
ブは快適でありました。最乗寺は
五百年以上も前に慧明禅師により
開山、その時工事を行った五百人
力の道了薩撫が天狗に姿を化して
大雄山に竜ったそうで、境内は老
杉生い茂り自然にかこまれ靈気に
満ちていた。東京から六〇軒程の交
通便の良い所に、これほど立派な
巨寺があったとは思ひもよりませ
んでした。又大雄山の付近には手
ごろなハイキングコースも多く家
族、子供でも登山出来るように、
最乗寺を参拝されてから、ここを

登山出発口として明神ヶ岳を登り箱根側に下りられ、私も近いうち歩いてみたいものです。

第一日目の余語翠巖老師の御法話を頂き、殿堂での参禅と、又夜九時過ぎから催された御供式は、風吹き騒ぐ音響効果で神秘的な様子は、真に天狗殿が飛来するようでした。

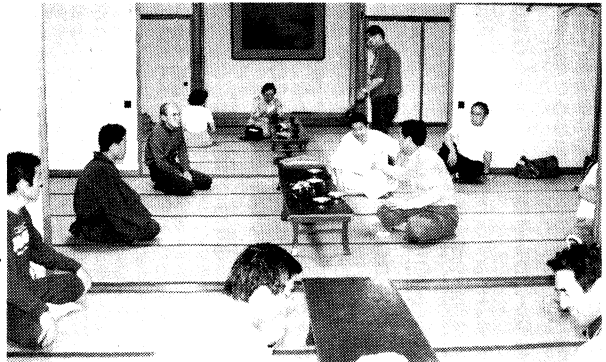
翌日私は、早朝より境内を参拝して回り、仁王門と御真殿に奉納されている大小さまざまな赤下駄、大きなものでは高さ二米程もある、天狗の履物もあり、左右揃って一体で夫婦和合と、又「下駄を預ける」諺のように功德があるようだ。帰路おみやげ茶屋「一十八丁目」は思い出に残る。創業二百年とかこれからも永く繁盛して欲しい……。

最後になってしまいました。この旅行を企画された椎名老師と幹事及びカメラマン担当の方々御苦労下され感謝するしだいです。

合掌



控室でのくつろぎ



大雄山最乗寺に詣でて詩う

我孫子市 三町 勲

「大雄山最乗寺は神奈川県南足柄市にあつて曹洞宗に属し、御本尊に釈迦牟尼仏を奉安し日夜鎮護国家を祈り、真人育成の道場として精進を続けている」と紹介されている。箱根外輪山の明神・明星両岳の中腹に位置し、老杉生い茂り靈氣満山に溢れ、まさに靈驗あらたかなる修道の場である。

一三九四年に了庵慧明禪師が本山を開創するに当たって、土木工事の大役を果たしたのが妙覚道了大薩捶である。道了さんは禪師のご遷化により、天狗に身を変じ大雄山をお守りしている。今回の一泊参禅会に偶然とはいえ道了さんに因む夜の御供式に参加出来たことは大変幸運でした。

大雄山最乗寺での二日間の修行は幽玄靈氣に育まれた生活であり、私に拙い歌を湧かせてくれました。

参道の十八丁目茶屋により

麦とろろ前に修行安づ
緑さす大雄山の石段を

掃きつつ知るや積みし人の汗
朝の作務掃握りし手に汗し

踏みし石畳経文に見え
御供式白狐走り闇に消え

道了さん想い大杉仰ぐ
坐禅石拝みながら参道を

登りつめて心洗わる
もみじ葉の紅葉せりと手寄せれば

実りし種の紅き色付き
参禅の修行つみし最乗寺

参道下り凡夫にかえる

椎名老師の禅講で紹介された良寛の「たれが我が詩を詩と謂う」に勇気づけられ発表するしだいです。

初めての体験

沼南町 宮田 哲男

昨秋、この会の仲間入りをさせてもらった私にとって、この度の一泊参禅会は初めてのことで、それだけに参加する迄は緊張や不安がありました。

しかし今、無事参籠を終えて実感することは、椎名老師をはじめ先輩の皆様方の御指導をいたゞいて、新鮮でそして充実した体験をしたと云う喜びです。それは一貫してきびしさの中にもほのぼのとした温みのある感じでした。以前私は企業研修会で、大勢の社員と共に某寺院で参禅したことがありますが。それを思う時、今回の参禅会は、自らが道を求め、自発的に参加した云はば同志の集いの持つ独特の連帯感、更に裸同志のふれあいによるぬくもりを感じました。「人身得ること難し、仏法あふこと希なり」と云うお言葉がありますが、この参禅会の縁に恵まれ、一泊参禅をしながら同じ求道の皆様と文字通り寝食を共にする縁をいたゞいたことは、何と嬉しいことでしょう。

最後に椎名老師の禅講「良寛詩抄」には感銘しました。老師の折

に触れ時に応じて私共を指導下さる御熱意に感謝します。それから良寛さんに関する造詣の深さ、と云うよりも老師の良寛さんに対する深い慕情のような熱いものが脈打つるように拝察します。それがすばらしい御講義の源泉だと思いました。有難うございました。

現成公案の旅

印西町 富田 文字

私にとって、この度の参禅の旅は二回目となりました。大雄山最乗寺は、次男が一度参拝して、とても良い所だと申しており、楽しみにしております。

深山の中をバスで登りつめて気が付いたことは、境内には、本堂を始め、ここに建造物の多いことに驚きました。一日中拝観しても終わらないでしょう。

寺では、坐禅堂まで参りますために下駄を履かねばなりません。何十年も下駄を履いたことのない私は、珍らしくて、石段を降り降りしたら、足を痛めてしまいました。これも修行の一つと思えました。夜、御供式が行なわれ、石段の下には、松明が燃え、両側に並んだ僧侶の方々の読経の響きに、思わず身の引き締る思い

でした。その中、白衣に身を包んだ方が、脱兔の如く御膳を頭に乘せて、階段をかけ登って行く式が行なわれました。私達が頂いた夕食と同じご馳走を、道了様にお供えする式と伺いました。

山主様の「現成公案」の法話と椎名老師の「良寛詩抄」の禅講は、深く心に残り、ただただ有難く聞かせていただきました。

無事、帰宅いたしました。から、思いますことは、坐禅を、何年やっても一心にならなければだめだということでした。また初心にかえって始めたいと思います。

皆様いろいろな迷惑をおかけしたことを、心よりお詫びいたします。

幹事の誇り

船橋市 加藤 健之

当会に参加させて頂き二年に少し足りないのに、一泊参禅会の幹事の重責を引き受けることになりました。昨年の例にもとりまして、行ききのバスの中で、自己紹介と現在心不可得のようなものの発表の場を作らせて頂きました。皆様本当に工夫された発言をされて居ましたが、小生幹事の宿命でやれ高速道路の料金支払いだとか、集金

だとかで一部聴き漏らしたのが心残りではありません。

昨年の幹事・三町様ご挨拶の中で「今年の幹事が言いにくいだろうから、迦葉山の幹事が言いますが、休憩後の集合がもたつく」と幹事が困りますので、皆様協力してやって下さい。」と言って下さいました。二日間を通じて小生は一度も皆様の離合集散に焦りを感じた事はありませんでした。しかもそれが軍隊の如き統率管理とは全く無縁な状態でした。自然に集まって来て頂き、数えるとびたり揃っておられるという感じです。

幹事の不手際より二日が二日共皆様をあややメシ抜きにさせかけてしまいました。何とか無手勝流でした。食いしん坊の小生はそれを自慢しようと思っておりましたが時が経って行くと、そんな事は些細に思えて来りました。

椎名ご老師に導かれて、当参禅会に参加させて頂いただけのこと



作務も大切な禅行

誇りこそ大きなものです。三町様を始めとする道友の方々に支えられて大過なく帰宅出来たことが誇りです。

ご縁をいただいて

船橋市 北岡やす江

待望の檀徒のお許しをえまして、参禅会にも参らせていただき、胸のふるえる歓びを覚えました。

禅とは、厳しくむずかしく、近寄ることのできない行ではないかと思っていた私に、坐禅の仕方を一つ一つお教え下さった方丈様にただただ、感謝いたしております。坐禅の後の『正法眼蔵』のご提唱を聞かせていただくのも、楽しみの一つになりました。その時々、感動もいつしか忘れておりますが、折りにふれ思い出させていただき、有難く思っております。この私の想いが通じたのか、長男夫婦が、毎朝お佛壇に、お灯明をあげてお詣りして出勤するようにになりました。いつ行きまして、新しいお花をあげてくれております。これでいっしょ迎えがあっても、嬉しいことと、やっぱり自分のことを第一に考えてしまうこのごろでございます。他事ですが、長男は大宮市に在住しております。

「天地法界の風光」

大智頌古―即心即仏―

現成公案没商量
 槩苦氷寒不覆藏
 保護即心心即佛
 眉間日夜放毫光

現成公案、没商量、
 槩苦氷寒、覆藏せず。
 即心、心即佛を保護して、
 眉間日夜、毫光を放つ。

参禅会の皆さん、よくおいで下さいました。ずうと方丈さんからお話を聞いておられるであろうから余計な話は聞かんでも済むかと思うが、また違った話も宜しからうから、大智さんの偈の話でもいたしましょう。ご存知のように、大智素継禅師は総持寺のご開山（瑩山禅師）の孫弟子に当る人です。その人の偈頌を借りてお話をいたします。

現成公案没商量

偈頌というのは、漢詩の形を借りて宗意安心を述べたものです。現成というのは、現に出来ているもの、現に成れるもの、森羅万象そのものを現成という。公案というのは、普通禅宗の辞典を引くと「公府の案牘」と出ている。お役所の規則のように従わなくてはならぬもの、



法話中の余語老師さま

普通は師家が学人に宿題として与えるようなもの、一般的にそうゆう考え方ですが、公案という字を見ますとね、公に按配されている、過不足なく公に配置されていると言ふことだ。お互いさまみな、公のものだ。花も公に出来ているものだ、

大雄山最乗寺山主 余語翠巖老師

好きなものだけ匂いを嗅んでる訳にはいかないでしょう。いやな臭いも何んでも嗅がなければならないでしょ、公平に出来ている訳です。眼はいやなものでも何んでも、見なければならぬでしょ。身体も公平に出来ている訳だ。まあ公案というのはそう言う意味で、でている訳だ。『正法眼蔵』に「現成公案」の巻があるが、このことを理解する為に、そう、話す以上は理解してもらわなければならないでしょう。解らん話をしてもしょうがないから、一応、解っても解らんでも解るように話をしなければならぬから、このことを補足説明すると、釈尊の十二月八日のお悟りの時の話がある。

見明星悟道云

十二月八日の朝ですね、明星をご覧になってお悟を開かれたと言う。その大要は、

我與大地有情同時成道

と書いてある。道を悟られて、こうおっしゃったと言われている。この「我」というのは、お釈迦様のことであらうと普通常識的に受けとられているが、昔のお祖師さん方は文章の約束通り読んではない。 「我」というのは釈迦牟尼佛に非ず、釈迦牟尼佛もこの我より出生し来たる。釈迦牟尼佛のみに非ず三世諸佛もこの我より出生し来たるなり」と言っている。すなわち天地の根元のもです。天地の生命、天地法界の根元のもの我という。お互い様、この時に逢ったことを、百草頭上無辺春

百草頭上無辺春

という。『從容錄』と言ふ本に書いてある。百草頭上無辺春、と言うことは沢山花が咲き乱れている辺と言ふこと、沢山花が咲き乱れているその一本一本の上に春が現成している。春になると花が咲くという訳であるが、咲いている花の一つ一つが天下の無辺の春をそこに現じているのだ。咲いている花は、それ、春の顔ですよ。春の現にそこに成じている顔だ。春なんて把握られないでしょう。春の風、春の

花、春の雨、春という字はついていても春そのものを把まえないでしょう。赤い花、赤い色をした花は、赤い色をした花で、春を現じているのです。これが百草頭上無辺の春。花に託してお互の姿をいう訳だ。お互いに千差万別の顔をして生きているけれども、天地法界の生命をこのような顔で現じているのですよ。みな勝手に造ったんじゃないですよ。

おそらく、自分で顔の注文した人はいなでしょう。生まれたらそういう顔になってたんじゃない、自分の注文品じゃないんです。これは、ここにこのような顔をして天地の生命なのだ。天地の生命とは、佛様のことだ。無量寿佛という。天地法界の生命を佛と言う。この佛の顔がお前さん達の顔なのだ。これを称して、百草頭上無辺春という。

「我」という我は天地法界の根元の生命、全てのものを現じて行く根元のもので。風が吹き、花が咲き、雲が走り、そういう全てのものの、力の根元が天地法界の生命、そういうものを「佛のおんいのち」という。それをどのようにに現じてゆくかという、お互い様、そのような顔をして生きているその事実だ。お互の顔が天地法界の顔なんじや。注問した顔ではない。自然に生れてそうになったんです。

この我というのは天地法界の根元で、春に当る。春が花の上に現じているように、お互い様の上に、佛が現じている訳だ。

我與大地有情と、という。大地の有情と、と別けて読むのではない大地有情とひっくり返して、眼に見えるもの一切、全部だ。

同時成道、といういい方は、これはいつでも、と言うこと、過去現在未来、いつでも、成道すということは過不足なく現じていることだ。

お互いさま、そういう生命を授かって、こうゆう顔で生きているのだが、注文品した顔ではない。注文した顔でないならゴテゴテいう訳にはいかんだろう。これを過不足なし、と。

ご承知のように「戒法」の十重禁戒の中に第四不安語戒、嘘を言うな。とある。この戒法の道元禪師のご説明は、『教授戒文』に、

法輪本転、無余無欠

と書いてある。嘘を言うなと言うことの説明ですよ。これは。嘘を言うなということは子供の時からわかっている。こゝにこう、わざわざ

ざ書くのは書く謂れがある。法輪本より転ずというのは、天地根元の法が、ずうーと行きたつておって、過不足なくこゝに現じている訳だ。これを過不足に思うのは、人間の計らい心だ。人間の勝手な計らい心だ。

宗教の風光というのはね、この人間の「計らい心」を捨てることだ。たとえば、これを花として活かしてある。花と雑草とに分けるのが人間の計らい心だ。向う側で見ると只だ生えているだけです。カーネーションはカーネーションのように、雑草は雑草として只だ生えているだけだ。おれは雑草だとして生えている。人間が区別して見るだけ。これを「計らい心」という好き嫌いが出てくる。

「信心銘」と言う書物を、お聞きになったことがあろうと思うが、「撰りこのみするな」と書いてある。『信心銘』と言うのは達磨さんから三代目にあたる方が書いた禅門の書物だが、

「本當の道理は少しも難しいことは無いんだが、たゞ撰りこのみするな」と書いてある。競べ合うなということだ。撰りこのみしないということは、みな一諸ということ、等価値だ。人間の評価を越えている存在の世界だからです。人間の好き嫌い、あれが好き、これが好き、赤い花、白い花、その中で黄い花が好き、と言うのが好き嫌い。天地の春の顔がこうなっているのだからどれもこれも同じことだ。皆さんの顔でもどれもこれも同じこと。それでも器量が良いのがいい、と言う訳だ。「別嬪さん」というのは「別嬪さん」でない方からすると判る訳だ。このごろはコピーが盛んで、何んでもコピーが出来る。バイオテクノロジーとやらで、同じ牛や魚のコピーが出来る。「別嬪さん」のコピーを作って、世界中そのコピーで埋めたら「別嬪さん」は居ないことになる。わからんかな、そういう状況、とんでもないことだ。どれもこれも本當だ。撰りこのみするから人間は余計な苦勞をせんならん。そのようなことで、ね、どのような姿になっていてもそれで過不足はない。過不足がないという法式が出来たら、ゴテゴテすることはいらんでしょう。不足があるから、「あれも欲しいこれも欲しい」盗んでみようとなる。佛様になろうというのも泥棒根性。むずかしいことを言っている。そのようなことを考えるではない。そう思わんな、現にこゝに現じているではないか。それが建前ですよ、これが嘘

をつくなと言ふことだ。

不妄語戒、と言ふことは嘘をつけんように出来ていること。男は男、女は女と、ちゃんと生きている。この根元の生命をわかつた時が不妄語戒がちゃんと守られているときだ。

嘘をつくなと言つたって、守られんでしょう。人間、嘘のつき通しですよ。真面目に嘘をいわなで、真ともにも言つたらみな腹を立てるだろう。自分の身の廻り考えてごらんない。早く帰れと言いたいが、そう言うともずいから早く帰つてほしいんだけど、「もう一杯お茶をどうぞ」とやる。

自分には嘘はつけんです。そういう存在だと気付くことが不妄語戒ということの性質です。

不殺生戒というのは、ものの生命を殺るなんて言つて澄ましこんでいるが、そんなこと言つてられんときがある。法事のお膳で、大根や人参を死んでる精進物だといって、平気で食べるが、あれは生きてるでんすよ。まあ、だんだん難しくなりますが、とにかく嘘をつけんように出来ている。それは要するに天地法界の生命を現していることだ。そう言う過不足なくそこにある。そのことが成道すと言ふことだ。

いつでも具なわっている、ゴテゴテ言うことはいらん。現成公案といふことはね。現にそこに出来上っている、大地有情と言ふことだ、い、ね。大地有情と言ふことがこれ現成です。公案というのは、我と法界の生命を言う。天地法界無量寿佛の一分を受けておる。

没商量、商量というのは、問答を聞いたたり、議論したりすること。いうので、ゴテゴテ言うなと言ふこと、そうなつておる人だから。これで全部済んだようなものだが。「即心即佛」と言う大智さんの偈頌の第一句が、大体今のような意味合ですな。

槩苦氷寒不覆藏、

第二句、槩苦というの「きはだ」という染料で、大変「苦い」のだぞうだ。槩は苦い、氷は冷めたいという。禅宗の通常の言葉で言いいますと、「柳は緑、花は紅」と言うことです。そう風になつていて。道理として、現にそうなつていて。

槩苦、氷寒、その通りの姿で出来ておる。覆藏せず、藏してあるものは一つもない。現にそこにある通りだ。年を取つてくると、頭は禿

げてくるし、身体も弱ってくる。化粧するのもよいがごまかせません。その姿はその通りのものです。その現成公案の姿をこの句で表わした訳だ。

三句目はね。

保護即心心即佛

六祖さまの孫弟子に当る馬祖道一というひとがおられる。馬大師が「即心是佛」と言ふことを言つたんですが、どうゆうことかと言つと、普通に読み下されるときは、心がそのまゝ、佛だということ。

だが「如是」という言葉がある。「宝鏡三昧」というお經があるが「如是の法」と一番先に書いてある。文章の約束事では、ずうーと説明してきて、かくの如し云々、という風になつてゐるが『宝鏡三昧』では「如是」と一番先に來てゐる。

「如」とは一如とか眞如とかと言ふます。一つごとし、眞のごとしと読む。眞と言へば良いのに眞の如し、と言ふ。ようなものだと、言うことです。何んとも解らんことを言うものだ。こうゆうことが沢山出てくると思いませんか。

『参同契』というお經がある。契という字はね、文書などで正本と副本があつて、合わせ目に印を押しますね。合わせて一つになつたことを言う。ぴしゃつと一つになつたことを言う。現成公案。公案と現成は一つだと言いましたが、こうなつてゐる姿の中から公案と現成を別々に考えないと言ふことです。人間は別けて考えるように出来てゐる訳だ。本来一つのを現成と公案とに別けて説明しなければならんように出来てゐる。余計なことを考えたものだ。何も考えないでいゝのに、そうゆう風に人間が出来てゐるから仕方がない。猫はね、魚をとつても泥棒したと思つてないよ。そう思ひませんか、ぶん殴られて逃げるだけだ。余計なことを考えるから苦労せんらん。考えん方が幸福だ。いわゆる「豚の幸福」。そうなつて居たいんだがそうなつてはおられんのかから仕方がない。いらんことを考える。こうゆう存在はどうゆう訳だ。何故人間は死ななければならぬか。余計なことを考えて苦労している。死ぬ時が来たら死ねばいいんだ。今朝こゝで問答の時、若い和尚が「人間は何故死ぬんでしようかと」問うてきた。「わしにも解らん、解らんけれどずうと生きてゐるは困るだろう」と答

えたよ。とにかく考えるように人間は出来ている。

参同契の参は現成、同と言うのは公案ですよ。二つに別けんでも良さそうだが、そうやってんだから仕方がない。こう見ると一つではないので、一つの如しだ。眞の如しだ。そうゆうことなのです。

如という字は天地法界の生命と言うことです。公案のことを如とい

います。
是というのはね、この白墨とか、この量とか、指し示すときに使う言葉です。現に現われている姿が是です。ですから如是という自体が現成公案ということです。

お互の顔は「如の是なり」です。天地法界の佛様の顔なのだ。

これは馬祖道一が言った「即心是佛」、心も是も佛も「如」のこと
で、即は「是」です。そうゆう関係のことを言ったのです。即心即佛
というのはそうゆう関係を重ねて言った訳です。

天地法界の中の生命を授けて生きている。八十まで生きても三歳で
死んでも同じことだ。八十まで生きれば立派な葬式してもらえ
る、
弔詞も読んでもらえるけれど、三歳ならそのようなことはしてもらえ
ない。けれどもそれは同じ価値のある生命である。天地法界の中では
ね。人間の算盤ではそれは知りませんが。

八十まで生きても三つで死んでも同じだと解ったらそれは実に素晴
しい人だ。天地法界の風光はそうゆうものです。三つの無量寿佛の生
命、八十の無量寿佛の生命、人間の算盤で勘定してたんでは解らん。

天地法界の顔をして、生きているこの私の年は、そんなことみなお
まかせだ。まかせておけばそれで良いんだ。あるお婆さんがね、あ
んな幾つだと聞くと阿弥陀さんと同じ年だと言う。阿弥陀さんは幾つだ
というかと私と同じ年だと言う。そうゆうもんじゃ、阿弥陀佛が二つに
生きているんだ、俺が生きているとは違うんだよ、みんな。

これが宗教の風光です。本当の安心の姿です。どっちに転んでも同
じことだ。そうゆうのが、

即心心即佛です。佛教というのがあって、この互いの五尺の身体が
あって、というようなのは違うのですよ。佛教のようなものがあ
って、何んてのは、何にもならんよ。キリスト教があつてイスラム教が
あつてお互いに俺の所が本物だと喧嘩している。困るな。俺の所が本

当だと思っているからそうなる。

そうゆう道理を考えて見ると、一本の円い木の筒を考えて見ると解
かる。眞二つに縦に切ると長方形が出来、眞横に切ると円ができ、
斜めに切ると楕円形ができる。元は一本の筒なのだ。文化の違いによ
って、文化の風土性の違いによって受け取り方が違う程度のこと、根元
のものが解れば法界は一つのものだということが決ってくる。

俺のところは四角だ、俺のところは円だというだけだ。困ったこと
だ。インドでもヒンドウとイスラムが喧嘩しておる。民族がみな亡ぼ
される、こんなことなら宗教なんか無い方が余程幸福だ。

即心心即佛というのは、大宇宙の大生命の中の一分をこの形にとり
入れていると言うことだ。そうゆう感じができたら安心なものでしょ、
宗教的安心とは努力が足りるとか足らんと言うこと、違う。

最後の句はね、
眉間日夜放毫光

お釈迦さまの眉間に白い卷毛まきげがあつて、白毫びやくこうという。白い毛です
ね、白毫光という、佛様の眉間についてますね。その眉間から晝夜を
分かつた毫光ごうこうを放っていると言うのだ。どうゆうことかと言うと、

このことなのです、お互いがこの顔でもって、天地の生命を生
きている、と言う安心ができた時は、朝から晩まで行っていることが、そ
のまゝ佛の行になる。

こゝ（大雄山）は、修行道場でもありますので若い修行僧が来てお
ります、僧堂で食事をするときは一時間ぐらいかゝります。朝の食
事はお粥で、おかずは梅干と漬物程度ですから十分か十五分で充分食
べられますが四、五十分かけて食べます。坊さんの食事はややこしい
ことをすると思われませんが、本来の精神は、「食べていることが自分
の生命」なのです。食べることに中身のことをいわない。食べること
を手段としない。そういう行き方の根本法則がある。早く食べてしま
おうと言うことを考えない。

ね、掃除もその通り、人に会って喋るときもその通り、一時一瞬が、
全部自分の生命だからです。それを手段にするのではない。ご飯を食
べる、食事をすると言うことが生命を養う手段であると考えていると、
食事の行は、うるさくて仕方がない。

生きている姿だ、撰りごのみしない。これが大事で、これが大事でない、とゆうことを考えない。全部自分の生命の歩みとして、早く済まそうなどと考えない。一般には食うに困るということがある。たしかに食物は大事だからね。

このごろ、一般にゆとりのある生活なんて言いますけど、瞬時、瞬時が、ゆとりがあるというのはそうゆうことです。撰びとりをしないうとゆうことです。

人間は死ぬことがいやで、生きることが大事だと言うが、それには違いないが、全部がそれ、天地の姿だ。それが解らんと、いかにも生命が大事ですが、死ぬことも大事ですよ。

死ぬことについても、どうゆう死に方をせんらん、なんていうのは煩惱の最たるものだ。どんな死に方をしたって構わないでしょ。みんな。と思うけどね。

禅師さまだって大喝一声して死なんらんことではない。

先日ある会の講演を頼まれて行く会場にね、前の講演の要旨をプリントして置いてある。読むと、「修行すると立派に死ねる」と書いてある。それ見てそんなことあらせんと言いましたよ。それは妄想です。天地の姿だからね、任かせておけばそれでいいのです。こうせんらん、と言って努力すること、違うでしょう、人間の死に方まで指図することは出来ない。立派だとか、立派でないということが大体、計らいだ。

修行したら、痛いとき痛くなくなるなんてことはないのです、痛いときはやっぱり痛い。痛くないように死なんらんなんて出来ませんよ。痛い時は痛い、結構なことだ。無理に芝居をしなくてもよい。衆に生きなされよ。そうゆうふうにならかな気持ちになる為にも、やっぱり修行しなければならんこともありますな。

平らかに生きる、そうゆうもんだ。そうゆう安心が、天地法界の生命の一部分だという自覚があって始めて出来る。

みんな顔が違うように、違ったまゝで眞実だ。この五尺の身体、果敢ない生命のまゝに、それが永遠だ。ほかにある訳ではない。むずかしきうと、「無限のものは有限のものゝ上」にだけ出てくる場所がある」と、言うことだ。無限とか有限とかが、相対の観念。きれい、き

たないも同じこと。達磨さんがね、廓然無聖、といった。

廓然として聖なし、聖が無いなら凡もなしだ。凡と聖とは相対したものだ、一方がなければ片方もない。そのような相対した観念に引っぱり廻わさんように。全部、どのような面をとっても天地法界の生命の姿だ。

「生死は佛家の調度なり」。

これは『正法眼蔵』、「行佛威儀」の巻に出ている。

生死、生き死と言うことですよ、人間の全部の姿、衆生の一切の生滅の姿の全部を、「生死」と言う言葉で押えている。そのことが、佛家の調度品だと言う。「佛の家の調度品になるんだよ」という。お互いに生涯、悩みがなくなりませんから、それが一生涯の敵ですよ。天地の敵として存在する。何んて言うかな、そうゆう姿のまゝでね、佛家の調度品。ぶつぶついつていることも天地法界の莊嚴だ。天地法界の敵として安心して生きて行ける。

悩みは一生涯無くなりませんぞ。ちゃんと死ぬまである。たゞその扱い方だ。お互い様の姿が、天地の敵で、こう生きている。良い悪いの判断とは別のことじゃ。一生、この人間の生涯を意義があるとか、意義がないとか、と別けて考える人もある。「俺の人生は意義があったのか、なかったのか」。そんなこと誰が決めるんですか。「わしの人生は意義があったのか、無かったのか」どうやって決めるかて。「寸法」が無ければならんでしょう。「寸法」が。「一生つまらんことをした」、という人もいる。どこの寸法で計りましたか、考えて見て下さい。

「これからは意義のある人生を送る」、という人もいる。いまゝでの人生は無意義だったんですか。そうゆう勝手な寸法をこしらえて勝手に生きているから、人間は馬鹿なものだ。自分で勝手にそう決めている。そうゆう「人間の寸法」をみなこしらえんことだ。人間の寸法を立てることを「見」という。見込をたてる、これは煩惱の最たるものだ。人間の寸法でなく、佛様の寸法で生きて行くしかない訳だ。佛様の寸法とは天地法界の姿だ。人間の計らひの世界とは違うのだ、みな花と雑草に分ける計らい心で振りまわされているだけだけれど。

この広い世界を知ってほしいですな。ではこの辺で。

龍泉院参禅会簡介

一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）

一、坐禅 止 静 鐘 三声 坐禅

經行 鐘 二声 經行

放 鐘 一聲 放 鐘

一、講義 木版三通 開經偈を唱えて『正法眼藏』の提唱を聞く

講師 龍泉院住職椎名宏雄老師

昭和六三年八月より「発菩提心」の巻を提唱中

一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談

正午解散

一、参加資格 年令、性別を問わず、どなたでも参加できます。

一、会費 一切無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に毎年二月の第一あるいは第二日曜。（本年は二月四日）

积尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雜記

〔参禅会記録〕（一）内は座談

の司会者

六三年

四月二十四日 二九名

（八木下真司）

裏山にて「苟」掘りを行う。

五月二十二日 三〇名

（高間利介）

六月四・五日 一泊参禅

於大雄山最乗寺 二九名

幹事 小畑節朗

加藤健之

写真 徳山 浩

六月二十六日 二八名

（三町 勲）

七月三十一日 二八名

（添田昌弘）

八月二十八日 三〇名

（宮田哲男）

九月二十五日 二八名

（清水利一）

▼昭和六〇年四月、永平七六世

秦慧玉禪師の本葬の折、その大夜、

対真小参の導師は余語翠嚴老師で

あったという。

その問答の後で、提綱として、

次の偈を示されている。

生死去来は佛家を嚴る

佛家の調度、水花を看る

道環来住、春風の彩
普化の妙錫杵々として還かな
り

（原漢文、『傘松』五百四）

又、先般放映されたNHKテレビ「心の時代」でのご提唱でも、老師は

「生死は佛家の調度なり」を垂示されておられる。

何に故に生死は佛家の調度なのか、調度を入れる佛の家とは、どんな家か、と青臭いことを考えて大雄山に登った。

やはりお会い出来て良かった。

この一言に盡きる。一時間余りの「大智頌古、即心即佛」のご提唱は老婆心あふれるで垂示で、積年の疑問も氷解した。

道元禪師は「面授」の重要性をお説きになって止まないが、おこがましい限りではあるが、人が、文章などではなく、身体全体の表現で法を伝えて行く力を強く感じた次第である。

▼「天地法界の風光」は一泊参禅の折、余語老師のご提唱のテープを基にまとめさせていただきました。文責はすべて編集者にあります。

（節光記）